とをどんどん感じてもらいたいです。木の枝に自分で登って、自分で自分の作ったこういうサインボードを括りつけています。

これは稲刈りです。稲刈りも子どもは本当に良く話を聞いてくれています。ここは大人達の出番がたくさんあります。大変な作業なので、バケツリレーじゃないですけど、みんなで協力して手渡ししてやっています。ここでは昨日まで知らなかった人達が、田んぼを通してどんどん仲間になっていきます。

あとは脱穀です。これは昔ながらの機械で、手回し式のトウミですとか脱穀機なんかを使ってやっています。子ども達も「おもしろいね」「これどうなってるの？」「壊れちゃった。どうやって直そうか？」と言って興味を持っています。子ども達もやりたくって仕方がないみたいです。手を巻き込まないように大人も付きながらやっているんですけど、それも最初だけです。子どもはすぐにできるようなって、子どもは習うより慣れろという感じで、本当に慣れてくると何でもできてしまうんだなと思いました。

収穫祭もあります。自分達で作ったお米だから、やっぱりおいしいんですね。発表もこの施設でしてくれましたし、お餅つきも一生懸命やってくれました。おにぎりとかお餅を分けるんですけど、その端からなくなっていくんですよ。握っては食べ、ちぎっては食べっていう感じで本当においしそうに食べてくれて、本当にやって良かったなと思います。

それで藁工芸を最後にやりました。この藁工芸なんですけど、農工大の繊維博物館のサークル仲間が藁工芸を教えてくれます。こういったものも残さず伝えていけたら良いなと思います。

やっぱり、何もかも伝わらずに、なくなってしまったら、消えてしまったらお終いで、復活させるのは難しいと思います。今まで発表された先生方もそう思ってらっしゃると思うんですけど。細々とでもいいから自分達が細い糸でつなげていけたら、消えなければ、なくならなければ良いから、本当に細くてもいいから何かを守って、続けていけて、子ども達にほんの少しでも伝えていけたらいいなと思って、環境学習「田んぼの時間」をやっています。

まとめですが、生き物がたくさんいて楽しかった、おいしいものが食べられた、知る、触れる。1番良かったなと思うのが、家族の時間があったんです。10時から15時まで、お弁当を持ってきてやるものですから、本当にピクニックみたいな感じなんです。お父さんがいつも帰りが遅くても、土曜日の田んぼの時間だけは子ども達と一緒に来て、お母さんとお父さんが一緒に作ったお弁当を一緒に食べて、子ども達と時間を共にしたというのは良かったなと思います。それで田んぼの報告書に参加してくれた人達が書いてくれていますので、後でじっくり読んでいただきたいと思います。

たくさんの要素が田んぼにはあって、時間やら空間やら、本当に凝縮されているところなので、ずっとここで続けていけたらいいなと思っています。実際、田んぼがここから斜め向こうにありますので、まだご覧になってない方々は是非、帰りにでも休憩時間にでも行って見てきて下さい。終わります。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

早　崎　眞佐子（はやさきまさこ）
小金井市環境市民会議環境学習部会
小金井市在住。2001年に子どもの体験活動を行うためのグループ「ゴリラプロジェクト」を近所の普通の母ちゃんたち4人で結成。キャンプ・料理・工作などの活動を通し、子どもたちに豊かな体験をさせたいという思いを形にしてきた。また小金井市環境市民会議では、東京学芸大学環境教育実践施設での田んぼづくりを通して環境学習活動を行っている。

報告4
「環境学習と流域ネットワーク」

鈴　木　眞智子 氏
NPO法人
多摩川エコミュージアム
事務局長

こんにちは。NPO法人多摩川エコミュージアムの事務局長をしております鈴木と申します。また今ご紹介に預かりましたように河口域、中流になりますけれど、「等々力水辺の楽校」も主宰しております。お気づきかと思いますが、とどろき水辺の楽校の「楽」も、それから皆さんのお手元に「多摩川が教えてくれたもの」という2005年度の環境楽習の報告書がございますが、この「がく」が二つとも「学」ではなく「楽」になっています。これはfan school、楽しい学校という意味であえて使っているので、誤字ではありません。

まずエコミュージアムということにつきまして、川崎

市が1999年に多摩川エコミュージアムプランという推進を立てまして、その活動の一つとして、宿河原にある多摩川の堰の活用を考えました。その宿河原堰は昭和49年の台風で水害に遭いまして、改築されました山田太一監督の「岸辺のアルバム」というドラマの舞台にもなりました狛江と川崎にまたがっている堰です。その堰の管理所に、せせらぎ館という建物を国土交通省が作りました。その建物の中の一部で多摩川エコミュージアムプランの推進の拠点として、川崎市が管理運営を任されまして、拠点活動を始めたわけです。その時はまだ川崎市が主体となっていまして、我々市民活動がまだ成熟してなかったものですから、川崎市が主導となって活動したのです。そのとき私も推進委員の一人として、先程の早崎さんじゃないですけど、ごく普通のおばさんだったのですけど、参加してみなさいと言われて、入りまして、そこから二年の活動を経てNPO法人に移行しました。今年で丸四年、NPO法人として活動しております。先程どこかでご質問ありましたが、私たちの場合も初めは川崎市からの管理運営費として500万円程で活動していたのですが、NPOになったからには我々も自主的な活動をしていこうということで、自主事業としてどんどん受託を広げていきまして、ちょうど去年度の決算から、川崎市の受託事業からは500万円程、これは管理運営費です。それ以外の活動費は大体700万円ぐらい、ほとんど助成金と、それから受託事業ですね。例えば「音楽の町、川崎」というフレーズがあれば、じゃあ川原で音楽をやりたいねとか、川崎市の教育委員会がカヌーをやりたいと言えば、多摩川でカヌー教室をやろうなんてことで受託事業を受けています。その他私が関わっている環境楽習ついては、河川環境管理財団というところからの助成金をもらって、それで賄ってやっております。

なぜこの普通のおばさんがこんな活動にのめり込んでしまったかと言うと。下流域では私のことを多摩川の魔女と呼ぶ人もいまして、とっても優しいのにどうして魔女と呼ぶのか分からないのですが（笑）、まずこの等々力水辺の楽校を立ち上げ、活動してきたことがそっくりNPO法人の環境楽習に活かされているのですね。先程青柳課長さんがご説明されていましたが、多摩川は138㎞あるのですね。もう七年ぐらい前になりますけれど、私も小菅村に行って源流を見た時、やっぱりすごく感動したんです。「そうかここから水が来るのか、じゃあどこに流れていっているのだ」って、なんと138㎞先の川崎市の河口、海までつながっているのです。私は北海道生まれの道産子で大体道産子の女っていうのは気が強いんですけど、海までつながっているんだったら、源流、河口、海まで全部つなげた活動をしたいなって思って、それも子ども達と一緒にやりたい。ここは大学でアカデミックな活動の場で私の場合は頭空っぽなのですけど、子ども達と一緒に神様が与えてくれた五感を使って、体じゅうを使って、多摩川の魅力をみんなでどっぷり満喫したいなということで活動を始めまして、今年で五年目になりました。毎年タイトルを作ってやっていて、初めは多摩川を知ろうとか遊ぼうとか学ぼうとか色々やっていたのですけれど、今年やっと五年目にして「多摩川を育もう」というテーマにもっていくことができました。多摩川と共に人も育んできたなと、やっとこの等々力水辺の楽校で皆さんにいろんなことを知ってもらうチャンスがきたなと思っています。

（以下、パワーポイントを使い説明）

ここが魚濫川という川で何もない所です。今工事してるのですけれど。私もエコミュージアムとは何ぞやということで、随分この何年間か悩んできたのです。せせらぎ館という建物、先程長池公園でもネイチャーセンターがあると言っていましたが、建物、箱物の管理運営がエコミュージアムの推進だという考えの人もいまして、私は何か違うのじゃないかなと、少しずついろんな本を読んで、つい最近、5年目にして自分のやっていることがもしかしたらエコミュージアムなんじゃないか、流域の様々なものをつないでいく、しかもその一番が人じゃないかな、全ては人にあるんじゃないかなということで、最近ですがやっと、この何もない川でやっている自分の活動にちょっと自信がついてきたのですね。何もないのに自慢するのもおかしいのですけれど、例えば手前に見えるハナダイコンだったりナノハナだったり、このナノハナも全部外来種なのですけど、もうこれだけでも愛おしいんです。ここは魚濫川といって魚が濫れる川と書くんです。七年前初めて私がここに来たとき、本当に濫れるぐらい魚が取れたんですね。それで、これだと思いここで始めたわけです。

最初は恐る恐るで、毎回これは手作りなのです。橋も一回掛けておいたらホームレスの人に焚き木にされてしまいまして、それから毎回毎回作り直しています。

これは先程早崎さんの方でもやっていましたが、これは多摩川での野草の天ぷらです。山みたいにタケノコみたいな洒落たものはないのですけど、タンポポだとかヨモギだとかイタドリだとか、そんなものを天ぷらにしたりして食べます。

大体一回で平均して100人から来るのですが、開校

式になるとこれが大体180人ぐらい来てくれます。もうこんな感じで混んでいる温泉みたいなのですけど、これでも結構子ども達は喜んでくれています。これはがさがさ体験と言います。お気づきだと思いますが、この赤いものがライフジャケットです。川というのは大変危険な所なのです。安全だから子ども達を川に入れていると思ったら大間違いで、危険なのですということを初めに謳っています。危険だから自分の身を自分で守らなければいけないということです。多摩川もご多分にもれず大変汚くて、洗剤の泡で東横線の上にシャボン玉が浮かんできたというぐらい汚かったのです。高度成長期、川崎は公害の町で、多摩川は危険で臭くて誰も近寄ってはいけないというとんでもない川だったのですが、それが今年、鮎が130万匹も上がってきたと聞き、私はもう泣くほど感激したのです。足元を鮎の群れがダーッと真っ黒に帯状になって上がってくるのです。今年の3月14日に見た時は本当に感激で、続けて三週間ぐらいべったり見たんですが、確かにそのぐらいきれいになっているんです。しかしそのきれいさで安全だから川に入りなさいということではなくて、川は常に危険なのだということで、だから私は必ずライフジャケットを子ども達に着せています。こんな浅い所で大袈裟なと思う人もいるのですがそうじゃないのです。子どもというのはほんの10㎝でも溺れて死にます。

それでこのライフジャケットもセブンイレブン緑の基金の助成金で購入しました。元々その推進委員会の主導で水辺の楽校をやってみないかと言われて、私も以前から川で何かやりたい遊びたいと叫んでいたものですから、私もすぐ乗りやすい性格なので、「じゃあやったろうか」ということで、たかだかちょっと魚濫川で魚取れてうれしくなっちゃって、つい立ち上げてしまったのですけれど、なんと国土交通省の主体でもお金は一銭も出ません。ハードはいくらでもやりますが、ソフトには一銭も出ません。ましてや川崎市は小菅村と良い線行くぐらい危ないのですね。赤字の市なのでお金ももちろん出ません。さあどうしようと思いましたね。人を集めてしまったものの何しようかなと。大体女性の場合は食べ物で釣ろうと思い、じゃあ最初は焼き芋でもやろうかなんて言っても、その焼き芋のお金はどこから出るのだ、チラシの紙はどうするのだ、印刷はどうするのだ、芋を焼く炭はどうするのだって考えると、一銭も何も無かったです。それはもう仕方ないから、運営費は自腹だったのですけど、こういう設備投資は絶対に必要だなということで、助成金を出しました。セブンイレブン緑の基金はやっぱり肝っ玉が大きくて、何の実績もない私たちに、よしやってみようと助成金として確か165万円を出してくれました。喉から手が出るほど欲しいお金だったので運営費に回したかったのですけど、ここはみんなにボランティアでやってもらい、全額を設備投資に回しました。ここに見える青いテントですとか机ですとか先程のライフジャケットなど、日本財団ですとかいろんなところの助成金を3年間で700万円程頂きましたが、1円も運営費には使わず全額を設備投資に使いました。その結果が今、何人来ても受け入れられるという基盤になったかなと思っています。

この様子は、地元のお兄ちゃんが紙芝居をしてくれるのですね。小さい子どもはとても喜んでいます。このお兄ちゃんに今度は多摩川関連の紙芝居を作りなさいと言っているんで、ちょっと今年あたり楽しみに待ってます。

これはストーンアートをしている様子です。中に外人の女の子がいるのですが、この子はイギリスで博士課程を取っていて、川を学んでいるのですね。それで是非ということで一緒に参加してくれました。これがストーンアートで、子ども達が思い思いに多摩川の石を使って絵を描いてくれています。一番最初にこれをやったときは、ここにいる井村さんのご主人が地質学者なので来てもらって、大変専門的な勉強からまずは始めました。

これがうちの目玉商品で、河童の川流れと言いまして、ただ流れるだけです。500メートルぐらいただひたすら流れるだけです。これが子供たちには大変好評でして、実は私が一番初めにこれをやってみたら、これはいいな、よしみんなにやらせてみようと思い、やらせてみたのですけれど、感覚を全部使って多摩川と一体になれるという全然お金のかからないイベントです。

それからこれが川崎市の河口です。後ろに見えるのが羽田に行くモノレールなのですが、羽田の真ん前なのですね。川崎は公害の町なんて言われていましたけれど、こんな素晴らしい干潟があるのです。これを見て下さい。潮干狩りです。今年もやりまして、みんなでシジミ獲りをしてその場で味噌汁にしました。川崎は捨てたものじゃないですね。皆さん千葉に行かなくて結構です。是非川崎の干潟にもいらして下さい。シジミだけでなく、もう少し向こうに行くと汽水域でアサリも獲れますし、いろんな種類のカニが獲れます。また奥が良いのですね。奥が生態保持空間になっている葦原になっています。葦です。ここは冬になると冬鳥の楽園になります。野鳥観察をやるときは「河口は野鳥のパラダイス」なんてテーマ作ってやっています。

出ました！　小菅村物産館です青柳さん。これは去年行ったときに撮った写真なのですけど、うちの一年の中で一番のイベントが小菅村に行くことなのです。私が小菅村が大好きでして、義理と人情の世界で丹波山村は一回だけお付き合いしましたけれど、あとはもう小菅一辺倒ですね。先程の小菅村の紹介にうちの楽校の写真があったのですけど、このように、なぜか等々力水辺の楽校が行くときは台風の後で水かさが増えているのですね。毎年です。私が一番初めに行った日はハイヒールで行けたのですよ。何にも水が無かった。それがこうです。全くスリルとサスペンスに満ち溢れた源流体験になっています。これが先程お話しました瞳ぶちというところです。ドボーンですね。この子なんか余裕ですよね、にっこり笑っちゃって。去年初めて参加した女の子なのですけど。それでここにヘルメットを被った人がいるのですけど、この人が川崎市の消防局の方で、レスキューの担当者なのです。彼は阪神大震災のレスキューにも参加していまして、たまたま私の息子の同級生のお父さんだったんですけれど、立ち上げるとき是非、安全管理で入ってくれないかと言ったら、僕は陸はやったことあるけど川はやったことないから是非やらしてくれと逆に言ってくれました。レスキュー3というプログラムがあるのですが、そこで、多分全国で百人程度ぐらいしかいないと思うのですが、レベル2の資格を彼は取っています。全部私たちのとどろき水辺の楽校から研修費を出して、彼の他に3人行ってもらっています。多分、一つの小さな団体で3人もレベル2がいるのはうちぐらいだと思います。最近、あちこちで水辺の団体の立ち上げのときは是非来てくれということで、安全講習なんかにも行っています。

大体こういうことやると女の子の方が度胸良いですよね。これは長作地区の前の鶴川というところでマスつかみをやっているところです。これは川崎の漁師さんが作った柵なのですけど、これで流れ止めにしてやっています。これは去年の原始村の写真です。夜はこのキャンプファイヤーですね。すごく幻想的なのです。これもいいですね。先程捕まえた魚を塩焼きにしているところです。先程子供たちが必死だったのは、あんたたち取れないとお昼は食べられないよと脅しをかけたものですから、みんな半狂乱になって魚を追いかけるというわけです。

またこれは等々力に戻って、夏休みの水性生物の観察です。川崎市の公害研究所とタイアップして毎年来ていただいています。

これがもう一つの目玉のカヌー教室ですね。これも、うちのスタッフにカヌーのプロがいまして、スタッフと言ってもうちの場合全員ボランティアなのですけど、指導してもらっています。これを見るとき川崎の人間は涙が出る程うれしいのです。本当にこれが公害の町、川崎か、多摩川かと。毎年、このときは大体200人ぐらいの人が参加します。それで後ろの方に見える中州は、コアジサシの営巣地です。絶滅危惧種に近い鳥ですが、だんだんと戻ってきています。鮎が来るとちゃんと鳥も来る。自然はうまくできていますね。で、大体子供は飽きるとこんな風に河童の川流れが始まると。こっちの方がカヌーよりおもしろいやと言っている顔が見えます。

それだけではなく安全教室ということで、川崎市の消防局の人が来てくれて安全講習、救命講習をしてくれます。

これはちょっと変わっていまして、ボートではなく和船です。先程言いました歴史的な多摩川、昔多摩川に橋がないときは渡しをやっていましたよね。それでボートをやっている方がいるのですが、その人の先祖代々が渡し場の権利を持っているのです。それで彼は今、丸子橋の下のあたりでボート屋をやっているのですが、その方が是非協力したいということで、子供たちを今度はカヌーではなくボートで川下りさせているのですね。

これは二ヶ領用水です。先程のせせらぎ館というのは多摩川から川崎市内に用水を取っていたのですね。徳川家康の命令でお米を作りたい、昔は稲毛米っていうのが取れたのですが、そこの用水が今、農業用水にも工業用水にも使われてなくて、親水用水に整備されました。そこでここでは、良く環境楽習やるのですが、ここで釣り大会をしていますね。それから今ここに見えているのがせせらぎ館の前に台風でビオトープができてしまったのですね。できちゃったビオトープって名前を付けているのですが、魚が豊富なので、そこで魚を取って観察しています。ここの縁の部分に見えるのがソダです。護岸の方法で、国土交通省も三面護岸をやめて、多自然護岸というのですが、その中の一つにソダ護岸があります。これは、桜の木ですとか、山のいろんな木を使っています。

先程の早崎さんの方では藁で細工されていましたが、うちの方は多摩川のヨシでフクロウ、みみずく作りをしています。このおばあちゃんが手作り名人で、秋になり稲穂が実ってくる頃に、子ども達に教えてもらっています。一方こちらは小さな子向けに、草花を色々と使ったクラフト教室をしています。小さな子にフクロウを作ってもらうのは少し難しいので。

こちらが野鳥観察です。野鳥観察にオレンジ色は着てはいけないのですけど、この時はまだ素人だったのでみんな派手な服を着ていますね。これはヒドリガモですね。ちょうど橋のところにたくさんいます。

川崎市の臨海部にマリエンという建物があるのですが、毎年、冬になるとそこへ行きます。「よみがえれ川崎の海」ということで、かつて昔の漁師さんたちが権利を売ってしまって川崎は全部埋立地にしてしまったのですね。それをもう一度作り直したい、昔の海水浴場を取り戻したいということで、かつての漁師さんたちが活動しているのです。彼らは海苔漁師だったので、彼らから海苔の作り方を毎年、冬になると教えてもらっています。そういう形でリンクしています。

これはまた等々力に戻りまして、冬はやることがないので、クリーン作戦をやることにしました。ゴミ拾いや分類をしたりします。これがまた、一石三鳥ぐらいになるのですね。ゴミを拾ってきれいになる、ゴミの種類を知ることができる、なんてことで大変良い活動です。それで先程言いました通り食べ物で釣っているので、寒いときは焼き芋に限ると、焼き芋をやっています。

これは国土交通省がやったイベントなのですけど、緊急魚濫川お助け作戦というものです。一番初めにお見せした川が台風でこんなドロドロになってしまったのですね。田んぼでかいぼりという作業があるのですけど、そんな感じでドロドロの中、魚をバケツリレーで本川に返すことをしました。こんな時でも子供たちはプールと勘違いして泳ぎだしたりしているのですね。それで、いろんなお魚がいたねという話をしました。

もう一つ源流から河口、海までつなぐ活動の一つに、見覚えあると思いますが見えるのは横浜のみなとみらいです。このいかだはなんとワカメです。ワカメのいかだを作っています。毎年、冬になると行っていまして、10月頃に種付けをします。これが収穫です。こんなにたくさん採れました。ワカメというのは海の中の浮遊物です。変な話をすると人間の排泄物も入っているんですね。それを取り込んで大きくなるのです。だから、「えー汚い」なんて言う人もいましたけど、そうではないのです。自然は循環しているのです。自分のものは自分で始末しなければいけないのです。

俳優の中本賢さんが写っていますね。彼も参加してくれています。鮎と一緒に戻ってきた、絶滅危惧種のマルタというウグイがいるのですけれど、ご存知でしょうか。腹が真っ赤で、とても大きくて50㎝ぐらいあるのですよ。そのマルタ祭りというのを毎年春にやります。この子がうちのイメージガールでして、小学校一年生の時から六年生の今まで参加してくれている子です。この子は鯉を釣り上げています。

宿河原堰の向かいの狛江の水辺の楽校ですが、ここが泥炭層で化石が採れます。多摩川は昭島の方でアキシマクジラの標本が出てきたりと、多く化石が採れる場所なのです。それで、化石採りということで、こんなものが採れました。

変な終わり方ですが、これが大体のとどろき水辺の楽校の一年の活動の紹介になります。そういうことで、源流から中流域、河口域、海も全部つなぎたい。川崎市は多摩川の138㎞のうち32㎞も面しているのですね。これで多摩川を教材として使わないでどうするということで、川崎市が昨年の四月に環境局緑政部の中に多摩川政策推進担当という部署を作ってくれて、多摩川のことは一手にその部署が引き受けるということで、私たちと共に行政ともパートナーシップを組んでやっています。それでこういう市民の動きで、国土交通省を始め、流域の団体とネットワークを作って、多摩川流域ネットワークを立ち上げて、市民の交流をもっともっとしていきたいなと思います。また市民だけでなく行政も企業も入って流域懇談会ということで多摩川の抱える問題をみんなでやっていこうじゃないかと、先程の中村文明さんの『源流の四季』にも載っていますが、流域セミナーというのを年4回ぐらいで開催して、とにかく行政も市民も企業も、多摩川の好きな人はみんな集まって一緒にやっていこうじゃないかということを中心に活動し始めたばかりです。それで、それらの全てをつないでいくのはやはり人なんじゃないか、「エコミュージアム＝人」じゃないかなというのが、私がここまで来て辿り着きつつある結論じゃないかなということで発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

鈴　木　眞智子（すずき　まちこ）
NPO法人　多摩川エコミュージアム　事務局長

北海道生まれ。石狩川で産湯を使い日本海の波音を子守歌に育つ。多摩川土手の桜植樹から、エコミュージアム活動へ関わり2002年、等々力水辺の楽校を立ち上げる。現在、二ヶ領せせらぎ館を拠点とするNPO法人多摩川エコミュージアムの他、多摩川流域懇談会運営委員会、多摩川流域ネットワーク（TBネット）の事務局をつとめる。多摩三浦丘陵から多摩川までの自然、環境、市民活動のネットワークの構築をライフワークと

して活動をしている。

多摩川エコミュージアム交流フォーラム ワークショップの内容報告

＜グループ①…小菅村＞

井村：まず木がなぜ1本100円にしかならないのか、という質問があったのですが、実際東京電力など企業と関係して直接ユーザーに売るかたちであれば、1本100円というよりはもう少し高く売れる。実際世の中一般で言われているところから、値段を変えるという経済的な次の1ステップをするような動きがあるという話がありました。

それから、東京電力など、いろんな人達いろんな団体が入ってきたりというのは、観光客としてもカウントされているわけですけど、「観光客はどのくらい年間来ていますか」という質問がありました。それは、多摩川流域から年間19万人くらい来ているということで、それで、振興課や多摩川源流研究所などの村が企画している企画、いわゆる、「村がこういうイベントやりますから来ませんか」という呼びかけに対して来ている人はその19万人のうち年間2,500人いますという話がありました。

この観光客を源流研究所なり村の役場なりが呼んでいるときに、もう一方で地域の子ども達に地域を知ってもらう、愛着を持ってもらう取り組みをやっているという詳しい話がさらにありました。先ほどの青柳課長の説明でもありましたけれども、春には山菜取り、夏には源流歩き、秋にはきのこ採り、そして冬には雪の上の足跡ウォッチングをしていて、それを「小菅人を育む会」という地元の人たちが地元の子ども達に伝えるというかたちをとっています。その中心になっている人達というのは、地域でエコツアーをいろいろ計画できないかな、と考えている地元の有志が集まった「エコセラピー研究会」です。地域のことを子ども達に伝えることは、将来的にもエコツアーにつながっていくというような意識と意志を持ちつつ教育活動を地域の中でやっているという話がありました。

そこで、青柳課長から逆に質問がありました。「皆さんを流域人として考えるとして、源流を残すための方策をどのように考えますか」という質問です。この問いについて考えてみました。答えは出ませんでしたが、キーワードとしては経済がでました。今、小菅では住民中心のエコツアーをやっていこうとしている。観光協会の人がやってくれるというのではなく、自分たちでお客さんを呼べるようなことを各旅館なり民宿なりが考えていこうと取り組んでいるという話がありました。それに対して、エコミュージアムの実際の経済効果はあるのですかと問いがあり、「あります。」という青柳課長のお話でした。実際の村の行政の中では職員の数がどんどん減らされたりという、やっぱり経済を考えなければエコミュージアムは持続していかないという話にもなりました。

では実際どういうふうな経済効果を生めば過疎化が多少抑えられ、有効的なエコミュージアムの形成がなされていくのかというと、まずは、今小菅村でもがんばっていますけれども、地元の情報をいろんな形にしてまとめていく。それと同時に、無形のものを生み出していく、地域をいろいろアレンジした形で伝えることをもう少し考えていったほうがよいという意見がメンバーの中から出ました。

今まで、「遊び」ということがエコミュージアムの考えの中に意外に入っていなかったのでは、という意見があって、「遊び」というキーワードのもと、伝える側の自分中心ではない語り部、うまい伝え方があるのではないかと。何かを「作る、造る」というよりはもっとソフト面、民間伝承などの伝統的資源によって持続できる地域づくりにつながっていくのではないかというところで、ここからさらに話し合いたかったのですが、タイムアップになりました。以上です。

＜グループ②…長池公園＞

嵯峨氏：新しい公園管理運営の話ということでしたけれども、参加者の方とともに内野さん、私、樋口先生という感じで、割とゆるい感じで雑談をしながら進めていきました。

いくつか補足の質問で出たのが、長池公園オープンまでの経緯はどうだったのかということで、ご講演の中でもあったように、ハンノキ林の保護が昭和40年代に起こったことが契機になった。市民による公園管理運営にまでいく経緯はどうだったのか、ということについては、自然館、ネーチャーセンターのみ2001年から地元のNPOがかなり潜在的に管理運営をしてきた実績が認められたということです。内野さんご自身は植生調査のプロとしてこのフィールドにずっと関わってきたということです。

公園内の小動物についてはどうですか、という質問があって、ノウサギ、タヌキ、シマヘビ、ヤマカガシ、アオダイショウなどがいます。そのほかに、タイワンリ